

No. 28	昭和44年11月25日 発行 編集者： 後藤光男
ねじればね	▽592 大阪府高石市高師浜2丁目4-4 電話 堺61局5374番 日本甲虫学会
November, 1969	▽658 神戸市東灘区御影町天神山46

## ラベル印刷のあれこれ(2)

後藤光男

H

活字・付属器具が揃ったから、いよいよ印刷にかかろう。まず版組みである。横組みであるから、活字は右から左へ1つ1つ並べてゆく。データラベルを組む場合、上から組むか下から組むか人によって違うが、下から組む方が何かと便利である。下から組む場合は活字バサミを手前・右に傾けて、下から積むように組んでゆく。例えば大阪府高師の浜、昭和44年10月1日、後藤光男採集のデータラベルを組む場合にローマ字綴りでは、Osaka Pref. Takashinohama, 1. X. 1969, Mitsuo Goto となるから、私はすべて頭を揃えて下から Mitsuo Goto, その上に 1. X. 1969, 3段目に Osaka Pref. 最上段に Takashinohama と組み、空白の部分はその都度スペース(コミ)で埋めてゆく。私は前もって活字を組む部分を除いて他は大形のスペースで埋めてあるから、版組は最小の面積ですむ。大形のスペースは活字バサミの巾一杯で長さの  $\frac{4}{5} \cdot \frac{3}{4} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{2}$  等板切れで作っておくと便利である。

版組みが終れば自分の好みに組めているか、誤植がないかを見直す必要がある。活字を拾い終った段階で必ず校正すべきである。刷上って誤植に気付くのは拾い違いでなく前の版を崩してケースに納める時に入れ違えるためおこることが多い。

活字バサミのネジを締めると版組は完了であるが、ラベル印刷でもっとも重要な段階はこれからである。すべての空間にスペースが1分の隙間なく差し込まれていて活字が完全に固定されておれば印刷に入れるが、そうでないと再び活字を拾い直すことになる。完全に固定された活字面だと紙面に美しいデータラベルが捺されているが、不完全だと活字バサミを下向にしたら紙面に活字が散らばってしまう。これは活字が固定されているように見えたが、ごく僅か

の空間があったためである。

欧文タイプライターで印書した場合、字の印書面は広い狭いの違いはあるが、活字の巾は同一であるから、何段印書しても字数が各段同一なら巾の末端は一致する。タイプライター書体とごく一部を除いて他は前号のE項でのべたように長さは各ポイント同一であるが巾は違う。例えばI・JはM・Wの $\frac{1}{3}$ ぐらいしか巾がなく、大小52文字で同一巾の活字はごく僅かであり、同一個数の綴りでもその巾はかなり違う。頭を揃えても綴りが違い必要個所に・、ーを入れスペースも差し込むから、各末端はかなり違うのが普通である。各末端の違いは必要スペースで埋めて揃えるのだが、ごく僅かの空間を生じた場合は紙を代用する。ごく薄い紙を差し込んだために組版が完全に固定されて印刷に移れる場合が多く「紙一重」という言葉がもっともピッタリくる。

印刷前での活字の落下を未然に防ぐには、版組があまり動かない程度にネジを締め、組版の下部が下になるよう持替え、活字バサミのニギリを手前下にして、活字バサミと机などの端と平行させて軽くトントンと活字バサミを2・3回端にあてると、活字の下部が揃い空間の有無がはっきりする。空間があればスペースでもって埋め更にネジを締めて、活字面に手のヒラをあてて静かに活字バサミを逆さにしてみる。1字でも抜けると1段はおろか組版全部が抜ける危険があるから、抜ける段の末端にスペースか紙を差し込んで固定し、これを繰り返して活字が全く抜けなくなれば組版は完全に固定されたから、更にネジを締める。これでデーターラベルの原版ができた訳である。

## I

つぎは印刷である。ラベル印刷でよく質問を受けるのは活字はうまく組めているのに、どうしてもきれいに印刷できない点である。これはローラーでインクをガラス板かゴム板にのぼし、活字面にインクをつけるのがこのガラス板かゴム板上である。これでは美しく印刷できる訳がなく、インクを少量ずつローラーでガラス板上に均等にのぼし、順次濃くしてゆく。均等にのびたインクをローラーでもって活字面に転がしてつけるのがコツである。

自分では意識していなくても人それぞれクセがあって、右か左に又更に右さがりや左さがりに力が入るものである。最初の1・2片を捺してみると、インクの具合と自分のクセが紙面にはっきり出るから、この点に注意して捺してゆくと全面均等のきれいなラベルが印刷できる。

印刷は上から下に捺すよりも下から上に捺す方が捺し易くて頭も揃え易く、一端が揃っているから各片を切断するのに手間がかからないようである。

## J

枚数の多いデーターラベルを印刷するため何回もインクを補充しローラーでのぼし続けると次第にインクがねばってきてその上活字面の凹部にもカスがたまってくるから、ローラーのすべりが鈍くなってきたら、ベンジンで活字面とガラス板を掃除しなければならない。活字面は古ブラシにベンジンを浸ませてこすればよく、ガラス面はベンジン液をたらすとインクが溶けてしまうから簡単に掃除ができる。

ラベル印刷は活字・インク・ローラー・ガラス板等すべて常に最良の状態であれば、美しいデーターラベルは印刷できないものである。

## K

ラベル印刷を終わった組版とガラス板はその都度ベンジンで洗い、活字は1つ1つ活字ケースの各コーナに戻しておいた方がよい。インクの付着した活字をそのまま放っておくと、活字の凹面にたまったインクカスが固まり、次から使用ができなくなる。

## L

印刷は厚手の紙より薄手の紙の方が印刷し易いが、あまり薄い紙では針差しに困るから用紙はある程度の厚みが必要である。用紙は種類によって年月を経ると一様に茶色っぽく日焼けするのがある。特に模造紙はこの傾向が強いので出来るだけこれを避け、焼けにくくてインクの吸収力の優れた用紙を使われるようおすすめしたい。

## M

データーラベルを出来るだけ小形にしたいなら縮版によるほかない。これは必要地名のラベルを印刷し1片ずつ必要なだけ紙に貼り合せて原図とするか、タイプライターで美しく印書して銅板か亜鉛板に縮版する。かなり高価となるが写真植字・オフセット印刷の工程を経ると、非常に美しいデーターラベルができる。これだと写植の際レンズの操作で活字の巾か長さだけを縮めることができるので、一般活字では見られない味のある特殊スタイルのデーターラベルも可能である。この他一眼レフカメラで原図を接写でフィルムにとり引伸してもよい。しかし印画紙利用のラベルは余程定着を充分しておかないと、年月が経つにしたがって茶色に変色してくるおそれがある。縮版ラベルは好みに縮尺できて、何地名分も一度に刷れる利点があるが、原図の修正を慎重にしておかないと縮版効果はあがらない。又地名の組合せも充分検討してお

かねば、かえってその整理に手間がかかるものである。

## N

以上のように苦労して作った個性のあるデータラベルを皆それぞれ標本に付しているが、データラベルに Coll. M. Goto となっていれば、ほとんどの人は後藤光男採集ととり、後藤光男コレクションであるにとらないのが普通である。しかし Coll. は採集とも蒐集とも2つの意味にとれるから、採集ということをはっきりさせる意味からラテン語の Legit を略して Leg. M. Goto とか M. Goto leg. としてよく使われている。どちらかといえば、×××× leg. とした方がまぎらわしくなくてよいと思われる。自分の標本を美しくするために、何でもかんでも自分の作ったデータラベルに書きかえてしまう人もあるが、惠興・交換等で入手した標本は自分の規格に統一することなく、元のままのデータラベルを付けておくのが、提供者への礼儀ではないだろうか。

## O

志賀昆虫普及社の好意で同社のカタログにある昆虫用軽便印刷器のセットから手押器（価格380円）だけを購入した。これは前号で紹介した活字バサミの2号と同一巾だが、長さが半分しかなく、7号（5.25ポイント）活字の4段組用である。私は2号に馴れているのか、これではバランスがとりにくくて使いにくい。前から志賀製で印刷している人は、2号では捺すとき組版の位置の見当がつきにくく、中央に組版しているといわれる。いずれにしろ使う人の好みと馴れの相違と思われ、どちらがよいともいい切れない。

## P

採集場所や方法を標本に付けておきたい時に私は寄主（HOST）ラベルに書きこんだり、別に印刷して付けているが、必要な場合ラベルを見なければならない。最近では色物の艶紙や模造紙が豊富なので、これを利用している。

例えば灯火飛来（黄色）・トラップ（茶色）・水中（水色）・樹皮下（黒色）とか出現月を1月（白色）・2月（黒色）・3月（茶色）・4月（淡緑色）・5月（緑色）・6月（濃緑色）7月（淡青色）・8月（濃青色）・9月（グレー）・10月（オレンジ）・11月（黄色）・12月（灰色）と決めておき、色紙の4角片（5×5か5×10耗程度）や丸型（事務用パンチで打ち抜く）に形をかえて用いると便利である。赤色は腐肉採用や10月に適する色だが、タイプラベルと混同するので避けた方がよい。

## 紙製標本箱の作り方補稿

後 藤 光 男

前号でレントゲンフィルムの空箱を使って、インロー形標本箱の作り方について紹介したが、ガラス蓋式についてはくわしく触れなかった。その後2枚貼り合せの板紙を更に1枚補い3枚合せとして、ガラス蓋式も作ってみた。3枚の貼り合せはフィルムの内箱板紙(感光防止用の黒色紙、1mm厚)を中にして、外箱板紙(1.5mm厚)を両方より貼り合せ4mm厚とした。この厚さと重量感もあり、底をもっても底に敷いたポリエチレンフォームが圧せられず、標本も動かない。ガラス蓋式にするには次の2方法がある。(前号図面参照)

1. 蓋・底板用のC板(27.0×18.0cm)の1枚をガラス板にし、A・B板の箱形枠組みに直接接着する。蓋箱に紙レザーを貼るとき、ガラス板にかかる紙レザーの巾を5~10mmに一定すると、紙レザーで枠取りした蓋箱になる。紙レザーを貼る前に接着部を強い紙で下張りしておく、一層強くなる。

2. 蓋・底板用のC板の1枚は外側10mmずつ残して内側を落してしまい、A・B板の箱形枠組みに接着する。紙レザーは少しく巾広にして、C板の方にはみ出る部分はC板の枠板の裏まで巻き込む。ガラス板は蓋箱の裏側から、C板と接する部分に接着剤を塗り接着する。一昼夜書籍等で重しをかけると完全に接着する。

### 文 献 紹 介

Fauna Japonica, Carabidae—Trancatipennes Group

土 生 昶 申 著

XIV+338pp, 527 text fig., 27 pls.

Trancatipennes Group は広義のアトキリゴミムシ類であって、本書は Oda-canthini, Hexagoniini, Pentagonalicini, Masoreini, Lebiini, Zuphiini, Dryptini および Brachininae の7族1亜科の総説である。属や種の検索表とともに、各種についての詳細な記載、分布のほかには生態的知見も加えられている。いささか紹

介がおくれ、既に同好の士はお求めのことと思われるが、甲虫愛好者は是非とも座右に具えられることをおすすめしたい。

発行所は東京都千代田区神田錦町2-2 東京電機大学出版局、定価は4,400円。

(大倉)

A Monographic Study of the Lepturine Genus *Pidonia*  
MULSANT (1863) with special reference to the  
ecological distribution and phylogenetical relation  
(Coleoptera: Cerambycidae) By Masao Hayashi

大阪城南女子短期大学研究紀要に報告された、全世界に産するヒメハナカミキリ属の総説(英文)であるが、従来混乱していた分類を白紙の立場で再検討し、過去の業績のすべてとタイプ標本についてこれを確認し、主として比較形態学、生態分布学的な研究方法に新しい分野を開拓して、更に全世界のハナカミキリの族と主として昼間活動性の諸属を参照して、系統的にまとめた論文であり、著者が先に明らかにした「分布帯論」の1部の証明を提出したのとして注目される。カミキリムシ愛好者は勿論、昆虫に興味を持たれる同好者の一読される価値ある文献としてすすめたい。

種々の都合で、数回に分けて発行される予定で、現在第2部まで刊行された。発表された刊行物の性質上一般には入手が困難であるが、著者の好意により別刷形式で希望者には大変安い価格で便宜を計ってもらえるので、直接著者宛申込みたい。(第1~2報既刊2部、▽共250円)

申込先 ▽546 大阪市東住吉区矢田住道町804 大阪城南女子短期大学 林匡夫氏宛

第1部 71頁 (1968年) 既刊

抄録、緒言、謝辞、方法、分類、*Pidonia*属、*Mumon*新亜属、*Pidonia*亜属、*Insuturata*-群、*Amentata*-群、*Signifera*-群、*Amurensis*-亜群、*Ohbayashii*-亜群、*Signifera*-亜群。図版: 1-10

第2部 43頁 (1969) 既刊

*Alticollis*-群、*Gibbicollis*-群、*Lurida*-群、*Aurata*-群、*Ruficollis*-群、*Omphalodera* 亜属、*Thesalia* 亜属。所属不詳の種。分布、地理的分布。

第3部 以下続刊

生態的分布、系統学的関連、研究史、農林業との関係、参考文献、摘要、図版。(後藤)

## 原色日本昆虫生態図鑑 I・カミキリ編

小島圭三・林匡夫共著、保育社、A5版、295頁、原色56図版、幼虫の部分図  
凸版29図版、布クロス装丁上製本、箱入、¥2,200、昭和44年2月1日発行

カミキリムシだけの図説についてはかなり以前からその計画を聞いていたが、今般生態図鑑の第1輯として刊行された。年月をかけた労作の集大成であるとともに原色図鑑では定評ある保育社からの発行であるので、その出来ばえはすばらしい。

我々が野外でしばしばお目にかかる普通の種や、カミキリ屋の間でも珍品とされている種を混えた美しい生態写真173図と、北海道から沖縄まで現在日本で記録された720種の標本写真のほかに、これまで輸入木材についてきて日本各地で採集された海外種41種も2図版におさめられ紹介されている。

本書ではこれまでの図鑑類では知ることができなかった属名・種名の語源が記されているので、アマチュアの虫屋にとっては益するところが大きい。ただ標本写真は全般に拡大率が低いので、小形種を本書によって同定することは一寸むづかしいのではないだろうか。

巻末に幼虫による分類が詳細な部分図とともに解説されており、食樹一覧表も付されているので、採集家はもとより農林関係の実務家に便利であり、是非一読をおすすめする。(後藤)

## 原色日本昆虫生態図鑑 II, トンボ編

石 田 昇 三 著

当会々員の石田昇三氏が、その蘊蓄をかたむけられたトンボの図鑑が、このたび保育社から発行された。ほとんどの邦産種(166種8亜種)が56葉の原色図版に見事に再現され、さらに同氏が腕をふるわれた生態写真が一層の色どりをそえている。なお、幼虫の写真も随所に見られ、また羽化から分布までのモノクローム写真が16葉付け加えられており、くわしい解説とともに読者の目を楽しませてくれる。トンボを研究される方々以外にもおすすめしたい図鑑である。昭和44年6月1日発行、定価2,200円。(大倉)

新 入 会 員

新入会員の紹介

— 1997 —




新入会員の紹介

（氏名）




住所変更（表示変更を含む）





申告退会



認定退会

——バラエティーに富んだ“ねじればね”を希つており——

採集記録・変った採集法や整理法・思い出・採集地今昔  
好きな採集地・思いつき等 原稿用紙で編輯子までお寄  
せ下さい。

——原稿をお待ちしています——

昭和43年度収支決算書

(自昭和43年 1月 1日)  
(至昭和44年12月31日)

一 般 会 計

日 本 甲 虫 学 会

収 入	の 部	支 出	の 部
科 目	金 額	科 目	金 額
会 費	375,020	印 刷 代	317,634
バックナンバー 代	86,775	通 信 費	51,920
別 刷 代	16,525	消 耗 品 費	13,995
原色昆虫図鑑 印税	85,500	大 会 費	10,600
雑 収 入	28,659	幹 事 会 費	4,080
前 期 繰 越 金	284,142	雑 費	1,235
		次 期 繰 越 金	477,157
合 計	876,621	合 計	876,621

特 別 会 計

( 会 報 発 行 基 金 )

昭和43. 1. 1. 前期繰越金	503,348円
3. 26. 金銭信託収益金(42年9/26~43年3/25)	1,144
5. 20. 30万円貸付信託収益金(42年11/20~43年5/19)	9,270
6. 20. 20万円貸付信託収益金(42年12/20~43年6/19)	7,270
9. 26. 金銭信託収益金(43年3/26~43年9/25)	391
11. 20. 30万円貸付信託収益金(43年5/20~43年11/19)	9,270
12. 20. 20万円貸付信託収益金(43年6/20~43年12/19)	7,270
計	537,963
二重申告追徴税金	11,624
12.31 次期繰越金	536,339

## 「昆虫学評論」バックナンバー価格表

当会々報のバックナンバーの価格は下記のとおりです。

なお、1号または2号の分冊売りはいたしませんからご承知下さい。

第 1～ 4 卷	全部で	2 0 0 円
(ただし、第2巻第1～5号欠)		
第 5～10 卷	各巻につき	5 0 0 円
第11～15 卷	各巻につき	6 0 0 円
第16～20 卷	各巻につき	8 0 0 円
第21巻以降	各巻につき	1,000 円

	(第 1～10 卷)	
総 目 録	(第11～15 卷)	各 5 0 円
	(第16～20 卷)	

ただし、第1～10巻、第11～15巻、第16～20巻をまとめてご購入の場合は、それぞれ総目録を無料で差上げます。

注： 第5巻の残部は僅少です。是非今のうちにとりそろえられるよう  
おすすめします。